

## 2021年7月NHK北海道地方放送番組審議会

7月のNHK北海道地方放送番組審議会は、21日(水)、NHK札幌拠点放送局において、10人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。議事に先立ち、札幌局長から、7月1日付で新たに就任した委員の紹介とあいさつがあった。続いて、札幌局長と域内各局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、北海道道×東北ココから「いざ世界遺産へ！“北の縄文”大探求SP」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、8月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	村田 博	((株)村田商店 代表取締役)
副委員長	桐生 宇優	(北雄ラッキー(株) 代表取締役社長)
委員	今村 江穂	(認定NPO法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とから 理事長)
	金山 準	(北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授)
	倉本ひと恵	(オホーツクベーグル 代表)
	佐々木良榮	(デザイナー、(有)良栄・PLAN 代表取締役)
	成田 正夫	(ながぬま農業協同組合 代表理事組合長)
	西田 一博	(有限会社厚岸清掃社 代表取締役)
	西村 卓也	(北海道新聞社 論説主幹)
	船山 大介	(特定非営利活動法人 No Limits 理事長)

### (主な発言)

<北海道道×東北ココから「いざ世界遺産へ！“北の縄文”大探求SP)>

(総合 7月9日(金) 後7:30~8:42)について>

- いつもの「北海道道」とは趣向を変えた「東北ココから」とのコラボは、北海道・北東北の縄文遺跡群が世界遺産に登録される見通しだということを、視聴者に紹介するうえでもタイムリーな企画だった。番組では縄文時代について「一般的な中学校の教科書で約1ページしか触れられていない」と指摘していて、教育現場でもあまり教えていないということがよく分かった。番組では、「狩猟・採集×定住」と「豊かな

精神文化」の2つをポイントとして紹介していて、分かりやすく制作されていた。実験考古学と称して、岩手県の御所野遺跡で実際に縄文時代の生活を体験して伝えており、エンターテインメント的な要素もあって非常によかった。ただ、縄文時代は一部の地域だけではなく日本全体にあったと思うので、北海道と北東北の特徴がもう少し分かりやすく説明されていればよかったと思う。國學院大学名誉教授の小林達雄さんは、縄文時代の食料の季節変化を表した縄文カレンダーで採集・狩猟などのサイクルがあったことが特徴だと示していたが、それは日本全体に共通する特徴なのか、北海道と北東北の特徴なのかがもう少し分かればよかったと思う。番組の合間に地域の遺跡を紹介していたが、ある程度似通ったところがまとめられていれば、より理解しやすかった。また、「現場と中継がつながっています」と秋田県鹿角市の大湯環状列石が紹介されていたが、現地が明るかったので生中継なのか録画なのかが分からなかった。

#### (NHK側)

縄文時代の始まりから終わりまでを遺跡からたどることができるのは、北海道と北東北の遺跡群が唯一の地域である。日本列島にはさまざまな縄文遺跡があるが、北海道と北東北の遺跡群に特徴的なのは、一貫して縄文の歴史をたどることができるという点だった。縄文中期までは温暖化が進み、後期に入り寒冷化するまでは森林地帯に豊かな実りをもたらしていたということである。「中継」とは厳密には「スタジオと別の場所をつなぐこと」を意味しており、番組自体は札幌局のスタジオで収録をしたものなので、「生放送」ではなかった。

- 東北の遺跡群も含めて縄文時代の魅力を詳細に紹介しており、勉強になる意義のある番組だった。「東北ココから」とのコラボも非常に興味深く、北海道と北東北の地理的な距離を感じさせない一体感のある演出はよかったと思う。コムアイさんのナレーションは番組の雰囲気にあっており、リモートゲストである片桐仁さんからは縄文時代に対する熱量を感じられた。これだけ多くの遺跡があると、人気の差が出てくると思うが、スタジオで遺跡はおもしろいという説明がされていて好感が持てた。各コーナーのつなぎの部分で、ほかの遺跡についての紹介がされていたのも非常によかったと思う。世界遺産に登録されると、地元の観光事業者は多くの人に来てもらいたいと期待しがちだが、今回の番組のねらいは「まずは、縄文について知ってもらう」ことだと思う。視聴者が遺跡を巡ってみたいと思うような紹介をした出演者の人選はよかったのではないかな。

- 世界遺産に登録される見通しの北海道・北東北の縄文遺跡群をひもとく、非常に勉強になる番組だった。小林さんは、縄文時代の食料の季節変化について説明しており、北海道埋蔵文化財センターの坂本尚史さんも「出土した深鉢形土器からは嘔きこぼれて焦げたおこげがある」と言っていた。煮炊きする穀物を栽培していたのかどうかと聞いた、当時の暮らしぶりをもう少し見てみたかった。そして、当時の暮らし方として、秋田県の大湯環状列石を紹介していた。気候が寒冷化して集落を分散させて暮らすようになったあとも、ストーンサークルに集まることで仲間との交流がなされていたと分かった。縄文人は人と人とのつながりが非常に強く、現代のわれわれに欠けている人と人との関わり方にも思いが至った。現代の情勢の中、やはり人のつながりが非常に大事だと再確認できる番組だった。
  
- 北海道と北東北に17もの縄文遺跡があるということに大変驚いたと同時に、遺跡の建物などを見てそのスケールの大きさや豊かな暮らしぶりが伺えた。縄文時代が日本の歴史のほとんどを占めているが、教科書の記載が約1ページで、教科書に載らない時代もあったと伝えていたが、函館市で発掘された国宝でもある中空土偶の「茅空」が、30年以上も町役場の金庫にしまわれていたという話も興味深く、その時代によって価値観は変わっていくのだと感じた。大湯環状列石についても、大湯ストーンサークル館の赤坂明美さんが「気候の変化によって人々が離れて暮らすことになって、ストーンサークルに集まって共同作業することでつながりを確認するコミュニケーションの手段になっていた」と説明しており、人間社会の原点を見たような気がした。歴史から現在の生活を考えさせられたことで、縄文時代をととても身近に感じる事ができた。番組の最後に、MCの鈴木貴之さんが「過去の原始的なことではなく、今生きているすべての源である」とコメントしており、強く共感できた。
  
- コムアイさんのナレーションは、番組の雰囲気にととてもあっていた。実験考古学はととても興味深く、厳しい冬をどのように乗り越えたのかを体験しており、生きる知恵について実践していたのが興味深かった。小林さんの縄文カレンダーについての解説はととても納得することができて、祖先の知恵や工夫を感じ取ることができた。縄文土器は、その縄目文様だけでなく、火焰型、水煙把手付型など、目に見えない精神世界を表現しているということから、縄文時代の芸術性が高いことを改めて見ることができた。土器を実際に使用して、料理を再現することができれば、土器がどのように使われていたのかを知ることができて、当時の縄文人の暮らしを身近に感じ取ることができたのではないかな。
  
- 北海道と北東北を結ぶ企画は非常に興味深かった。番組では、日本人の遺伝子の約10%に縄文人由来の遺伝子が受け継がれていると伝えていた。だが、予備知識がな

い状態で漠然と縄文人由来の遺伝子を10%と言われても分かりづらいのではないか。実験考古学と称して、当時のライフスタイルを再現して見せており、視聴者も一緒に体験しているような臨場感が味わえて効果的だったと思う。土器や土偶から縄文人の暮らしぶりや精神世界の豊かさを探求する例もいくつかあり、縄文時代からすでに自然と共存して見えない世界を表現する豊かな精神性があつたことは、非常に衝撃的で新しい発見だった。安定した生活環境を維持できた理由として、1年を通じて計算された狩猟・採集生活を送り、自然の恵みと一体化した暮らしが営んでいたということにも驚いた。中空土偶は発掘から30年後に国宝に認定されたが、時代の流れを経て、損得や利益の価値、判断との対極にある縄文的な世界や自然との共生が、人類の持続可能な生き方を模索するうえで切実な課題になってきたのだと思った。大湯環状列石のストーンサークルについても、共同墓地や祭祀場にとどまらず、劇場空間として多角的、日常的に重要な場所として機能していたということが分かり、想像力をかき立てられた。

- 縄文文化の多面的な魅力が楽しく、かつ分かりやすく伝えられており、全体として作りの丁寧さを感じた。縄文人の当時の生活を実際に体験したり、現代の縄文にハマる人々を紹介する際にもその人なりの関心と熱意に焦点を当てたりしている点が、とても多角的に縄文文化に近づく方法を教えてくれているようで、視聴者の関心を引きつけていたと思う。番組のポイントとして、「狩猟・採集×定住」と「豊かな精神文化」が紹介されていたが、「狩猟・採集×定住」に生活の実質的なリアリティーに重点があつたように思えたので、「豊かな精神文化」という面をもう少し掘り下げてほしかった。生活のリアリティーというのは、食についてだけではなく、どのようなことを考えて、どのように世界を見ていたのかということも含まれていると思う。そして、土器に手の込んだ装飾をするということは、縄文人の知性や生きるということそのものに深く結びついた意味を持っていたのではないか。それが「豊かな精神文化」という番組のポイントにつながっていき、より縄文人の魅力が伝わるのではないか。
- 鈴井さんやリモートゲストの片桐さんが、視聴者の興味を引くような雰囲気を作りながら、わかりやすい言葉で伝えており、非常に楽しく視聴した。北海道・北東北の縄文遺跡群は海外の評価が高いということだが、外国で実際に評価をされているポイントを教えてもらえると、より理解できたのではないか。実験考古学として、当時の生活を視聴者に伝えられるよう体験していたのは、番組全体としても非常に興味をそそる内容だった。ただ、北海道・北東北の1万年、1万5,000年前の生活が3,500年ほど前まで連続しているものがあそこにあつたと分かったが、あの当時の日本全体の状況は実際どうだったのか気になった。「一般的な中学校の教科書で約1ページしか触れられていない」という話は非常にもったいないという思いだった。日本の古き

よき文化が評価されたからこそ、今回の世界遺産登録の見通しになったと思うので、全国の子供たちにも伝ばするように今後につながっていけばよいと感じた。日本には古い歴史があるということは知っているが、改めて番組で取り上げてもらえることによって、日本の歴史の深さやすばらしさ、文化の美しさをこの番組を通じて学ぶことができるのではないか。

- 縄文に興味がない人にも興味を持たせるような内容だった。縄文時代についての記載が「一般的な中学校の教科書で約1ページしか触れられていない」ということで、子どもたちにも日本の歴史を学ぶよい機会を与えたのではないか。「北海道道」は重要なテーマの回るときに、「時間が短くて足りない」と思うことが多いが、今回は制作にゆとりを感じたので、もう少し深掘りするような話があってもよかった。例えば、縄文文化からアイヌ文化にどのようにつながっていったのかというようなことが分かれば、さらに興味を持ってより深く入り込めたのではないか。コムアイさんのナレーションは、番組の雰囲気に合わせて聴き心地がとてもよく、粘土細工の作家でもある片桐さんの起用もよかった。石おのの形を変えるだけで1万2,000年もかかったということに、人間が進歩するスピードの変化が感じられて、おもしろい例えだと感じた。
  
- コムアイさんのナレーションは、縄文にハマる人々の熱量に魅せられたときに、冷静に引き戻してくれるようで大変効果的だったと思う。縄文にハマった人々の熱量も画面から伝わり、縄文愛があふれる方たちがたくさん紹介されていて大変興味深かった。中空土偶は発掘から30年後に国宝に選ばれたとのことだが、ある日突然日の光を浴びることがあることに驚いた。北海道と東北の交易のあかしである栗で縄文ビールを作っていたことに触れていたが、北海道に栗が自生していなかったことを知ることができた。世界遺産登録については、番組で伝えていた情報の多くが述べられていたのではないかと思う。ただ、最終的に世界の時代と日本の縄文時代を並列表記にしてもらえれば、時代の流れがより分かりやすかったのではないか。

#### <放送番組一般について>

- 6月18日(金)の北海道道「オホーツク海 命はぐくむ大循環の謎」を見た。オホーツク海で2年がかりの大プロジェクトの調査の実態がとても丁寧に取材されており、冬の厳しい寒さの時期に学術研究船に乗った苦勞を感じられた。オホーツク海が豊かな理由は、どのようなメカニズムによるものなのか。流氷とプランクトンが関係して海が豊かになるといった知識はあっても、実際に映像で見ることでもとても分かりやすく伝わったのではないか。ブルームという植物プランクトンが大量発生する理由の解

明に挑む研究者や学生のような、海水温のグラフを基にした海水が大循環する仕組みについての説明はとても分かりやすかった。今後も調査は続けられると思うので、私たち視聴者にも調査の結果を分かりやすく解説する番組を制作してもらいたい。

- 7月2日(金)の北海道道「#ナナメの場 みんなでつくろう、子どもたちの居場所」を見た。家や学校で居場所を見つけられない子どもたちの居場所が本当に少ないということを実感し、このような場所の必要性を非常に強く感じさせられる番組だった。こども食堂やお寺を活用した寺子屋など、具体的な取り組みもたくさん紹介されており、そこに関わる大人の素顔も印象深いものだった。“ナナメの場”というのは、子供たちだけではなく、そこにかかわる大人たちへの支援にもつながっているのだと強く思った。また、ナナメの場づくりをキャンペーンで取り組んでいることも、公共放送として素晴らしいと思う。ラジオともリンクしており、リスナーとトークをしていること自体、すでにナナメの場が作られているようで非常に好感が持てた。番組の最後に、鈴木さんがナナメの場のことを家を建てるときの筋交いに例えていて、とてもじっくりくるコメントだった。
- 番組を見て興味を持った人が二次元コードにアクセスすることで、一人一人に何ができるのかということも考えられる時間になったのではないか。大学生がお寺を利用して地域の居場所作りに取り組んだり、お寺でふるまう食事を二条市場の人たちに作ってもらう交渉をしたりしていた。今後、地域食堂という形でどのように運営されるのか興味深かったので、プロジェクトの進行を見守りながら自分にできることを探していきたい。
- 身近な場所や地域で子どもの成長を支えるNHKのキャンペーンに大変注目している。北海学園大学の学生である加藤めいさんが自分で考えて積極的につながりを作っていく姿勢は素晴らしいと思った。親世代も受け身でサービスを提供されることに慣れている人が多い中で、これからの未来を生きる子どもや若者に本当に必要な資質だと感じた。それから、札幌市若者支援総合センター館長の松田考さんが子どもや子育て中の親に対する優しい眼差しをもつことの大切さを訴えていた。鈴木さんの筋交いの例えも、「子どもたちの環境が強固なものになる」というメッセージにつながっていて、ナナメの場の大切さをより多くの方々に伝えるためのよいヒントになったと思う。この活動を一過性にせず、今後も子どもと地域の関わりを伝えて視聴者の関心を喚起してほしい。
- 番組全体としては有意義で、とても温かい視点で制作されているという印象だった。学校の集団行動は、子どもによっては本当に窮屈でつらいものなのだろうと感じた。

いろいろな条件の下で暮らしている子どもがいる中で、家でも学校でもない第3の場があること自体はとても有意義だと思う。そして、それを伝えていくことはとても公益性の高い意義のあることではないか。一方、行政ではやり切れない部分を何とかしようと自主的にいろいろな方が動くと、どうしてもうまくいかない例や抱えている課題や問題が出てくると思う。今後はそういうものも含めて扱ってもらいたいと感じた。ナナメの場ということばはこのプロジェクトの造語だが、文部科学省のホームページにも“ナナメの関係”ということばがある。社会的方向性にも沿った大きなプロジェクトだと思うので、ぜひとも続けてもらいたい。

(NHK側)

ナナメの場はラジオ番組として制作し、その前置きとして「北海道道」でも放送することにした。メッセージ性をより強く出して視聴者からの声が集まるようにするためにも、WEBなども含めてキャンペーン化した。ナナメの場ということばは記憶に残りやすいので、その価値観も含めて広げていければと考えている。子どもたちの顔を映しながら取材をすることは非常に難しかったが、両親などを含めて取材したことでより伝わったのではないかと思う。

- 社会的な問題をしっかりと扱うのはさすがだと感じた。なぜナナメの場というものが必要な社会になり、それを解決するにはどういったことが必要なのか。われわれが考えて結論を導くための手助けとしてこういった番組があるのだと思うが、そういった課題と解決に触れるものを続編として制作してほしい。
- 公共でナナメの場を作らなければならなくなったのはいつからだろうか、という問題提起がなかったと感じた。以前は、地域と子どもたちのつながりが自然にあって、ナナメの場は当たり前のようにあったと思う。私たちが子供のころに失ったものと現在の社会が得た失ったものと、何がどう違うのかと感じた。簡単に答えが得られることではないと思うが、何を失って何を得たのか。そういうことを含めた番組制作を期待したい。
- 「ほっとニュース北海道」を見ている。札幌市東区でヒグマが出没し、襲われて被害者が出たという報道があった。各局が追いかけて回したことでヒグマが興奮してパニックになった可能性もあるのかどうか分からなかったため、状況を詳しく知りたかった。報道の力のすごさを感じることもあるが、逆に怖さを感じる。伝え方によっては悪影響が出ることもあるし、またよい影響が出ることもあるということを今回の

報道で感じた。NHKにもそういった点をしっかり考慮しながら取材を行ってほしいと思う。

(NHK側)

NHKの取材ではヒグマを追うことはしていない。現場の近くに記者とカメラマンは配置したが、取材者の安全も確保する必要があり、駆除が確認されるまで車から降りることも一切しなかった。

- 7月10日(土)の「北海道スタジアム夏ノ陣―第一部―」と「―第二部―」(総合 後6:05~6:45、7:30~8:45 北海道ブロック)を見た。「第一部」は、道内179市町村をリモートでつなぎ、そのうちのいくつかの市町村を無作為にピックアップして、司会の加藤浩次さんがその市町村を紹介する形で、加藤さんのフットワークの軽さが見えた。だが、クイズに参加するための二次元コードの表示時間が短く、読み込みが間に合わなかったのが残念だった。
- 7月16日(金)のローカルフレンズ滞在記SP「宗谷・喜茂別・弟子屈編」(総合 後7:57~8:40 北海道ブロック)を見た。それぞれの地域で自分の生き方を見つけて、活躍している人や頑張っている人が分かった。同じように地域で暮らす人が見ても共感できて、自分も頑張ろうと励まされるような内容だった。美しい風景と地域ならではの情報も紹介されており、心豊かに暮らしているようすが伝わってきた。短い時間の中で、取材される人や町のよさがきちんと伝わる構成は、ディレクターが1か月滞在しているからこそ見えてくるものがあると感じられた。地域の暮らしはよいイメージだけではなく、魅力を伝えることだけでもよいのではないかと思わせる番組だった。
- 7月17日(土)の【ストーリーズ】「北角裕樹が見たミャンマークーデター」を見た。日本人ジャーナリストの北角裕樹さんが現地で撮った映像などを通して、ミャンマーのクーデターの実情を紹介する内容だった。放送にあたっては、ミャンマー軍の反感を買って今後の取材が危なくなる可能性があったり、なぜそんな危険な所に行くのかという世論を改めて喚起したりといったリスクも考えられると思う。ただ、ミャンマー市民の証言や表情を映像で見ることで現地の緊迫したようすが伝わり、放送がなければ分からなかった事実が確かにあったので、それらのリスクを勘案したうえで放送する価値はあった。至近距離から撮った映像だからこそ分かることもあったが、いろいろな映像が混ざっていたので、誰が撮った映像なのか分類されているとより詳しく分かったと思う。北角さんは、拘束されたときも刑務所の中で知った証言などを伝えてくれており、現地で得た非常に重要な情報が紹介されるのは大きな成果



である。SNSや動画配信で現地の情報はある程度分かるが、NHKが放映することは国際的にも意義があると感じた。放送できなかった映像もあると思うが、記録としては非常に貴重なもので、高く評価できる番組だった。

- 7月17日(土)のETV特集「僕らが自分らしくいられる理由－54色の色鉛筆－奈良のインクルーシブ中学校」を見た。この春卒業した54人の中学生の半年を追ったものだった。重い知的障害のある子や家庭に問題がある子、性同一性障がいのある子などが同じ教室でお互いを知って手を差し伸べあっていた。校長先生の哲学の授業や1日かけて自分たちの気持ちを語り合う集中ホームルームといった教育実践も本当に優れていた。子どもたちの悩みや戸惑いなど、中学生の等身大の姿を通して、この中学校の日常の風景がよく伝えられていた。だれもが共に生き合うことが難しい世の中で考えさせられる、とてもよい番組だった。

NHK札幌拠点放送局  
番組審議会事務局

## 2021年6月NHK北海道地方放送番組審議会

6月のNHK北海道地方放送番組審議会は、16日(水)、NHK札幌拠点放送局において、6人の委員が出席して開かれた。

会議は、議事に先立ち、空席となっている委員長と副委員長の互選を行い選出した。

続いて、札幌局長と室蘭局長からあいさつがあり、議事に入った。

会議では、まず、「2020年度北海道地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」について、報告があった。

続いて、北海道道「詩梨ちゃん事件から2年 母と子をどう守るのか」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、7月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告が行われ、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	村田 博	((株)村田商店 代表取締役)
副委員長	桐生 宇優	(北雄ラッキー(株) 代表取締役社長)
委員	今村 江穂	(認定NPO法人子どもと文化のひろば ふれいおん・とから 理事長)
	倉本ひと恵	(オホーツクベーグル 代表)
	西村 卓也	(北海道新聞社 論説主幹)
	船山 大介	(特定非営利活動法人 No Limits 理事長)

### (主な発言)

<北海道道「詩梨ちゃん事件から2年 母と子をどう守るのか」

(総合 6月4日(金))について>

- 少子高齢化、核家族化、地域コミュニティの希薄化など、人と人との関わり合いの経験が乏しい親たちが多いという背景は自明のことだったと思う。地域ぐるみで親子の成長を見守り支え合うことが必要だが、そのことに対する理解が不十分であると分かった。そして、行政の各専門機関の連携がされてなかったという課題についても改めて深く考えさせられた。行政だけではなく、生きづらさを抱える家庭を地域がどう支えているかという視点が不可欠で、実態把握につながる支援の網を広げる努力をしているNPOや児童家庭支援センターの取り組みを興味深く見ることができた。番組では、DVの相談件数や乳幼児健診の休止による影響を指摘した上で、行政がSNS

を活用した支援の方法を進めていると伝えていたが、声を待つだけの対応には限界があるのではないかと。困難な状況にある若い世代を支えるには、日頃から子どもたちに温かいまなざしを注げるような地域づくり、人と人とのつながりが大事だという視点を、もう少し掘り下げて伝えてもよかったと思う。それでも、このような悲しい事件を2度と起こさないためにも、関係者だけではなく、すべての人たちに子育てに関心を持てるよう多くの道民に喚起したのはとてもよかった。今後もこのような報道を意識的に続けてほしい。

- 幼い命が犠牲になるニュースは胸が締め付けられる悲しさで目を背けてしまいがちだが、今回のような検証番組は事件を止める大きなストッパーになると思う。記者の解説は分かりやすく、それぞれの行政機関は問題点を知っていながら人任せだったと指摘していた。要保護児童対策地域協議会が取り扱った件数は、事件前の492回から事件後1,073回を超えたことが分かり、事件を契機に行政の横の連携が強化されたことを感じた。母親がSNSに投稿していた喜びと不安は、母親なら誰もが共感できる感情だと思う。子育てには葛藤や苦悩が多いが、それ以上に日々の子どもの成長は母親の心の糧でもあると思う。楽しさややりがいも多くあるということも、もう少し番組内でクローズアップできるとよかった。そして、番組の最後に「若い人のためのSNS相談はこちら」と行政や支援機関の相談先につながる二次元コードを紹介していたが、そうした取り組みをたくさんの方に知ってもらおうという意味でもよかったと思う。困っている方々に活動や思いが届いてほしいという、希望の持てる構成だった。
- 番組で改めて事件を取り上げることで、多くの人が改めて事件を振り返る機会になったのではないかと。事件を風化させないという点で今回の番組は大事だったと思う。亡くなった子どもがかわいそうという同情や、被告に対する非難を際立たせる番組もあると思うが、今回は母親を孤立させないためにできることをテーマに、支援団体の取り組みなどを紹介しており、事件は事件としつつも、将来に向けた視点で捉えていた。また、被告である母親は、暴力が日常化した複雑な家庭環境下で育ち、自分の子どもに対しても同じことをしてしまったという点から、さまざまな要因が複雑に絡み合っていると理解できた。行政機関が相談に乗るだけではなく、番組で紹介していたように児童家庭支援センターが親子の関わりに対してカウンセリングでサポートしていくといった取り組みが普及していけばいいと思った。

(NHK側)

女性ディレクターと女性記者の目線で取材をし、母親をサポートする環境に構造的な問題があるのだという点を柱とした内容になった。今後は、子育ての楽しさとやりがいなどといっ

た点も入れて制作したい。

苛烈な生育環境で育った子どもが親になると、今回のようなケースに陥る可能性が比較的高いことが取材で分かってきた。その多くは社会の中に埋もれてしまい、なかなか知られない面もあることも分かってきたので、事件から2年たったこのタイミングで番組を放送した。

- 現場となった家の近くに花やぬいぐるみが供えてあるシーンを見て、世の中は詩梨ちゃんに同情的で優しいという印象を持った反面、どこか人ごとのようで、社会は変わっていないという状況がこのシーンに凝縮されているようで印象深かった。検証報告書は「各機関が連携しながら、もう一步踏み込んだ支援をすべきだった」と結論づけていたが、もう一步踏み込むためには何が必要なのかまで言及してほしかった。1歳6か月の乳幼児健診の時で成長不良だと分かったときに、虐待が起きていると判断し、支援態勢を組むことができなかつたのか。判断するためには知識や経験が必要だと思うので、そのための人材を育てていく態勢が十分だったのか。各行政機関の連携体制は、どういうところに問題があったのかなどを知りたかった。また、母親と交際相手との関係が詩梨ちゃんにどう影響していたのかまで知りたいと思った。
- 個を優先するという社会になってきており、家族や地域の横のつながりがなくなっていると警鐘を鳴らすインパクトのある内容だった。行政の各部署の縦割りを変えることが難しいのは分かるが、視聴者がこれではいけないと考えるきっかけになったと思うので、この番組の果たす役割は大きかったと思う。恵まれていない家庭環境に生まれた子どもは、自分が親になったときに同じようなことを繰り返してしまうという負の連鎖があると分かった。視聴者は、その負の連鎖から抜け出せるような仕組みや、みんなが幸せに生きていくための仕組みづくりが大事だという意識を持てたのではないか。しかし、支援団体だけではなく、それぞれの市区町村も動いていかないと難しい課題だと思うので、行政に対して投げかける内容がもう少しあってもよかった。
- 番組では、乳幼児健診で成長不良に気づいていながら支援体制を組めなかつたと伝えていた。横のつながりがなく情報を共有できない縦割り行政の弊害が、今回の痛ましい事件に集約されてしまったのではないかと感じた。被告である母親は、詩梨ちゃんが生まれたあとはSNSにかわいいと投稿していたのに、そのときの思いはどこへ消えていったのか。そして、交際相手のことばを受け入れるようになったのはどうしてなのか。その辺りの背景と関連性が番組の中では見えず、分かりづらかった。ひとり親で子育てをしている方はたくさんいると思うが、そもそも自分が何に困っているのかが分からず、相談するという選択肢も生まれてこないのではないか。母親の

背景ばかりが掘り下げられていたので、子育ては母親がすべきだという見方ができてしまいそうで残念だった。

(NHK側)

番組では、交際相手に出会う前に、行政が母子の問題点に気づけたのではないかというところを描いた結果、交際相手との関係については比重が低くなった。

<放送番組一般について>

- 5月11日(火)の「ほっとニュース北海道」を見た。特集として「1人で着られる車いすドレス」について伝えていた。車いす用のウェディングドレスを作っている石切山祥子さんの思い、意欲、車いすの方のためにという気持ちのが的確に表現されており、取材・制作者のレベルの高さを感じた。その車いすのファッションショーの様子はNHK WORLD-JAPANでも放送され、北海道で活躍する方が世界に向けて紹介されるのは、北海道民にとってうれしい話だと思う。今後も、北海道で活躍する人を発掘、発信してほしい。
- 5月21日(金)の北海道道「コロナ第4波 それでも“すすきの”で生きる」を見た。多くの苦難を乗り越えた3人の女性にスポットを当てて、それぞれの思いや生き様を切り取る形で構成されていた。番組冒頭で、おにぎりを無料で配っている女性たちを紹介していた。自分たちよりもっと苦しい状況にある方へ支援をしているというのは、飲食業で働く人々の素の姿を切り出していて、飲食店でクラスターが多く発生しているという誤解を緩和することにもつながったのではないか。すすきのの歴史についても丁寧に描かれており、高度経済成長や札幌冬季オリンピック、バブル景気と崩壊などいろいろ困難に見舞われてきた街と、そこに常に前向きな姿勢で生きてきた芸者の澤田啓子さんの人生を重ねていくという紹介のしかたは本当に見応えがあった。澤田さんの「前を向きながら辛抱して耐えている」ということばは、年代や価値観の違いでどのように伝わるか分からないが、今大事なメッセージだと感じた。
- 6月11日(金)の北海道スペシャル「北の息吹を刻む ～絵本作家・手島圭三郎～」(総合 後 7:30～8:27 北海道ブロック)を見た。手島さん自身の解説もあり、作品への思いや制作の工程がとても分かりやすく、楽しく見ることができた。最終作となる40作目で引退すると知って残念な気持ちになったが、木版画による絵本が出来上がるまでの流れをととても丁寧に取材していた。北海道の自然や生き物への強い思いは、子供のころに暮らしたオホーツクに原点があったと知り、生き物の生き生きとした姿を描

けるのは、小さいころの経験があったからだと感じた。手島さんのスケッチのすばらしさは圧巻で、彫刻刀で作品を彫る職人技に感心した。番組では、絵本「しまふくろうのみずうみ」をアニメーション化し、音楽家の土取利行さんの曲に合わせて紹介していた。相性はとてもよかったが、絵本の持つストーリー性と作者の思いはアニメーションでは限界があり、絵本でしか描けなかったよさが伝わらなかったのではないかしら。しかし、春の命をテーマに作られた作品は、希望を与えてくれて深い感銘を受けた。

- この番組で初めて手島さんのことを知ったが、手島さんが制作に関して大変情熱にあふれた人であるということが素直に伝わってきた。作者の制作工程や考え方に集中した内容で、実に分かりやすく、入り込んで見られた。北海道から世界的に活躍する芸術家を取り上げるのはとても素晴らしいことなので、今後も続けてほしい。

(NHK側)

手島さんの絵本から伝わってくる躍動感やストーリー展開のすばらしさを、絵本の接写以上に伝えたいと思い、アニメーションを企画した。担当したディレクターが何度も取材し、多くの話を聞き出すことができた。

- 5月28日(金)の北海道道「天塩川“氷の一本道”の秘密」を見た。天塩川は日本で第4位の長さを誇る大河であり、河口から130キロに渡って一本道として凍り続ける川だと知った。水は温度の低下に加えて、刺激があって初めて凍ると知り、アンカーアイスが形成されることによって、天塩川が完全に凍ると分かった。深夜の取材は氷点下27度まで下がっていて、取材の過酷さと大変さも感じた。
- 5月23日(日)のNHKスペシャル パンデミック 激動の世界(10)「迫る“介護崩壊”新型コロナで揺れる老後」を見た。全般的によくまとまっていて、分かりやすい番組だった。新型コロナウイルスの感染拡大で介護施設の現場が大変厳しい状況になっており、慢性的な人手不足と経営難という明確なテーマだった。新しい介護様式として、ITの活用や非接触介護といういろいろな試みがあると分かった。東洋大学の高野龍昭准教授が、このままの介護保険制度ではサービスが絶滅しかねないことを指摘しており、そのとおりだと感じた。北海道の幌加内町が、介護予算とは別に町独自の財源で介護施設の支援をしている例を上げていた。町営病院の入院病棟を閉鎖したお金を介護支援に回しているということだったが、入院病棟がなくなり困っている人もいると思うので、完璧な対応策と言えるかどうかは難しいが興味深い内容だった。介護は命と向き合う仕事であることを国民の多くの人が理解し切っていないところがあり、そこは政治の場でも報道の場でも世に広く問うていかなければならないこ

とだと思ふ。

- 5月26日(水)の「風をつかめ！ヨーロッパアルプス大縦断レース」の再放送(BSP 後3:09~5:08)を見た。パラグライダーが主体のレースで、高いところから飛び出して上昇気流に乗って距離を稼ぎ、その距離をいかに速く飛ぶかというレースだった。映像は申し分のないとてもすばらしいものだった。ただ、きれいな景色を眺めて終わるだけにならないよう、操縦のしかたや構造、レースの組み立てについてももう少し説明があると見た人も分かりやすかったのではないか。
  
- 6月2日(水)のみみより！くらし解説「コロナで進む少子化 子育て支援に配慮を」を見た。新型コロナウイルスの影響で出産や妊娠を先送りにする傾向が強まっており、少子化がますます進行しているというレポートだった。専業主婦は、新型コロナウイルスの影響による外出自粛などで外部との交流が減り、孤立するリスクが高いという指摘は印象的だった。緊急事態宣言下で施設の利用を休止している所が多く、親子の交流の場や地域の子育て情報の提供といった学びの場などの機能がストップしているが、幼児期の遊びは子どもの発達に不可欠であり、連日の密室での孤立した子育てによる親のストレスが、どの地域でも本当に深刻だと思ふ。子どもや子育てに対して、地域の理解と温かいまなざしが広がるように今後も後押ししてもらいたい。

NHK札幌拠点放送局  
番組審議会事務局

# 5月北海道地方放送番組審議会休会のお知らせ

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、5月19日(水)に予定していた北海道地方放送番組審議会は休会となりました。

NHK札幌拠点放送局 番組審議会事務局



## 2021年4月NHK北海道地方放送番組審議会

4月のNHK北海道地方放送番組審議会は、21日(水)、NHK札幌拠点放送局において、9人の委員が出席して開かれた。

会議は、委員長の司会により開会。札幌局長からあいさつがあり、議事に入った。

議事はまず、「ほっとニュース北海道」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、5月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告があり、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	蛭田亜紗子	(小説家)
副委員長	村田 博	((株)村田商店 代表取締役)
委員	今村 江穂	(認定NPO法人子どもと文化のひろば ふれいおん・とからち 理事長)
	桐生 宇優	(北雄ラッキー(株) 代表取締役社長)
	齋藤 拓也	(北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授)
	佐々木良榮	(デザイナー、(有)良栄・PLAN 代表取締役)
	成田 正夫	(ながぬま農業協同組合 代表理事組合長)
	西村 卓也	(北海道新聞社 論説主幹)
	船山 大介	(特定非営利活動法人 No Limits 理事長)

### (主な発言)

#### <「ほっとニュース北海道」

(総合 4/5(月)～9(金)、または4/12(月)～16(金))について>

- 4月5日(月)～9日(金)の「ほっとニュース北海道」を見た。新しくなったオープニングの音楽はこれからニュースが始まるというインパクトのあるものだった。一方で新しいロゴはきれいだが、見づらいつと感じた。瀬田宙大アナウンサーの話し方は分かりやすく好感が持て、「超ローカル宣言」というキャッチコピーのとおり、ローカルなニュースが盛りだくさんで分かりやすい内容だった。番組冒頭で「きょうの道内ニュース」として主なニュース項目を紹介しており、どのニュースがいつ頃伝えられるのかが分かるのもよかった。「シリーズ 農林水産・最新技術」は、次はどうなるのだろうと明日も見たいと思わせる興味をそそる構成だった。各地の農林水産の新

技術や取り組みが非常に分かりやすく紹介されていて、いろいろとヒントをもらえる人もいるのではないか。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて大変な時期だからこそ、希望が持てるような特集だった。「故郷にレンズを向けて」という釧路局のカメラマンが故郷を取材するコーナーでは、自らも東日本大震災の被災者でありながら、自分にできることはないかという素直な問いと、地元出身のカメラマンだからこそ答えてくれた人たちの率直な思いなどが短い時間の中で伝わってきた。「JIMOTO自慢」のコーナーも全体的にバランスが取れているという印象を受けたが、浜中町のレストランを紹介していたが、シェフが料理を作るときにマスクをしていなかったことが気になった。「ローカルレンズ滞在記」は、ディレクターが1か月も滞在して取材するというのに驚き、どのような思いで企画したのか気になった。コーナーの中での二次元コードの表示時間が短く、読み込みが間に合わなかった。全体的にバランスの取れたニュース番組になっていると感じた。

#### (NHK側)

昨年度の「ローカルレンズ出会い旅」は不定期の放送ではあったが多くの方に見ていただけたので、定期で展開したいと「ほっとニュース北海道」の中で「ローカルレンズ滞在記」を立ち上げた。通常取材・ロケは何らかの取材対象・目的があってそれに向かっていくのだが、その発想を変えて、特に目的を立てずにとにかく行って1か月滞在させてもらって、その中から見えてくるものを伝えられないかと考えた。1回の取材・ロケでは見えてこない等身大の町や地域の姿を伝えたいということがコンセプトである。

- 「シリーズ 農林水産・最新技術」に着目して見た。「サケ稚魚の研究」は、浜中町の海とつながった藻散布沼を活用して育てた稚魚を海へ放流すると伝えていた。だが、番組では3年前に放流をしたと伝えていて、その成果がそろそろ出ていると思うので現段階での成果を知りたかった。また、地球温暖化の影響で最低水温から最高水温までの幅が広がるというのは分かるが、放流に適した水温を保つ日数が短くなることと、地球温暖化の関係がやや分かりにくく、温暖化が進むと水温上昇の速度が上がる理由も分かりづらかったので説明が欲しかった。「帯広市の和牛」については、AIが肉質を見分けて解析するような技術ができてきたというのは興味深いのが、北海道の牛に対して使うのではなく、福島市の牛に使われていた。北海道の畜産業に対しての貢献度はどのくらいあるのかが気になった。「強度の高いCLT」については、開発費用が非常にかかるとのことだが、どのくらい実用性があり価格の問題をどう解決するのか、もう少しいろいろな専門家や専門業者に聞いてみてもよかったのではない

か。シリーズとしては、意欲的にいろいろと調べられていて、新しい技術も紹介されていて関心を持って見ることができた。6日(火)には「衆議院北海道第2区選出議員補欠選挙」を取り上げていたが、選挙権があるのは札幌市の一部の選挙区内の人たちだけなので、選挙権のない人たちに何を伝えるか。どの党から誰が出ているかということよりも、誰が何を政策的に主張しているかを重点的に聞きたいと思った。各候補者の思いは伝えているが、この選挙の元になった「政治とカネ」の問題について誰も触れなかったのか、触れたけれども放送されなかったのか。それにどういうスタンスで臨むのかが国政にも影響する問題だと思うので、そこを聞きたかった。

- 新しいテーマ音楽はインパクトがある。番組冒頭で「きょうの道内ニュース」という形で、特集やその日に伝えたい大事なニュースを目次のようにまとめて示すのはよかった。週間を通して冒頭のニュースは新型コロナウイルスについての話が多く、変異ウイルスの感染が増えているということを毎日伝えていたのが印象に残った。だが、新型コロナウイルスの変異ウイルスへの感染が何人かという数の報告はもちろん大事だが、どういう点に注意しなければいけないのか、どういう特性があるのかということがあまり伝えられていないように思う。北海道の中で変異ウイルスの感染が増えているのであれば、変異ウイルスのどういうところが問題なのか、あるいはどういう変異の型があるのかなどを併せて伝えてもいいのではないかと思った。なお、道内の大学や医科大学などの専門家のコメントも入れながら、北海道の中から得られた情報を使って新型コロナウイルスについて説明していることは、とてもいいアクセントになっていた。それから、新しく加わった菅野愛キャスターと石川晴香キャスターがとても落ち着いている感じでよかった。瀬田アナウンサーの存在がとても大きく、「ローカルフレンズ滞在記」「ローカルフレンズニュース」のコーナーは、これまでの取材の積み重ねがとても生きていた。登場する人が、自分が住んでいる土地への愛着を語っており、とても好感が持てた。双方向演出に関して、二次元コードの表示が短かったので、もう少し長く映しておいてもらえるとよかった。

(NHK側)

ホームページの記事へ誘導する二次元コードの表示時間については、スタジオパートだけ表示するのではなく、VTR中も表示することなど検討したい。

- 「シリーズ 農林水産・最新技術」については、とても興味深い内容でどれも課題を克服して道内産の資源を生かす最新技術を端的に分かりやすく伝えており、視聴者の関心を喚起していたと思う。道内の各エリアの経済情報にも、新しい知見が盛り込まれていると感じた。そして、馬の出産がピークを迎えたことや、ニシンの群来、白

魚漁などの季節を告げる話題は、映像のインパクトもあって自然との調和も感じられた。その時期にしか見られない映像はこれからも丁寧に伝えてほしい。「チェンジ・ドット道東の地方創生」については、多くの人たちが関わって取り組みを進めることで、自分たちの町のよさや強みを認識できる、地方創生の一つのロールモデルになる手法だということが、二次元コードの先にある非常に読みごたえのある解説からも分かった。二次元コードを読み込むとディープな世界がより堪能できる仕組みになっていた。この回だけでは語れない素材のよさから、バラエティーに富んだ盛りだくさんでフレッシュな情報をお茶の間に届けるという印象を受けた。同じ時代を生きている北海道の人たちが、1日の終わりにまた明日も頑張ろうと思えるような番組になっていくといいなと感じた。

- 1日あたりの情報量、コンテンツの量はボリュームがあり、NHKの情報収集力と取材力がはっきり分かる番組だと感じた。新型コロナウイルスの報道については、テレビや新聞の報道ではなかなか分からない点が多く、結局はネットに頼ってしまう。新型コロナウイルスの重症化率や重症者数などを常にチェックしている人にすれば、新聞離れ、テレビ離れがそういうところで起きているのではないかと感じた。「シリーズ 農林水産・最新技術」については、北海道はやはり第1次産業で支えられており、その話題を特集として組んだのはとてもよかった。第1次産業に対しては成り手の問題など課題がある中で、番組で最新の第1次産業の取り組みを見せることは次の人脈作りにおいてもとても大切な情報なので、今回のようなシリーズはよかったと思う。「チェンジ・ドット道東の地方創生」について、士幌町の話については学生たちを含めて見事なマーケティングを行っていると思った。地に足の着いた地域おこしをきちんと取り上げて、分かりやすく見せてくれたのはとてもよかった。
- 4月12日(月)～16日(金)の「ほっとニュース北海道」を見た。日々のニュースの伝わり方という観点については、以前と比べて全く違和感がなく、これまでどおりきちんと伝わっていると感じた。耳の不自由な人にどう伝わるのかと音声をオフにして見ても、右上のタイトルの表示とテロップの組み合わせで内容がある程度理解でき、タイムラグはあるが字幕が後から追いかけてくるので問題なく伝わってきた。「ローカルフレンズ滞在記」はディレクターが1か月その土地に行ったきりで滞在するという企画で、そこで発掘される人や物は非常に興味深かった。いったん地元を離れてまた戻ってきた人にスポットを当てており、よそから人を集めるよりもいったん出ていった人を戻す施策のほうが移住策として効果が高いと思うので、こうして地元で頑張っている姿を伝えてほしい。今までは札幌とその周辺、あるいは各地の放送局の周辺の話題が取り上げられることが多かったが、この新しいコーナーは本当にローカルなところに入って行って、ローカルならではののおもしろい話題が取り上げら

れていて、よいと思う。新メンバーの菅野キャスターと石川キャスターは安定感があって、安心して見ていられた。双方向演出については、二次元コードが出ているので情報を積極的に取りに行く視聴者にとっては非常に便利になったと思う。ただ、表示する時間が短かった。表示すること自体が目的になってはいけなないので、一定期間ごとにアクセス数などを分析することも必要ではないか。

(NHK側)

「ほっとニュース北海道」は新年度からさまざまな点を一新した。「超ローカル宣言」というキャッチコピーのとおり、北海道のさまざまな地域の情報を丁寧に伝えていく。札幌以外の地域でも、その地域に根ざしてさまざまな取り組みをされ頑張っているみなさんに寄り添って、本当に地域密着の情報を伝えていきたいと考えている。

- 以前よりも充実した内容で見応えがあった。冒頭で、どの話題が何分ごろに放送されるのかが示されているのは分かりやすかった。「ワクチン接種について」は、町によって異なる取り組み方をタイムリーで知ることができてよかった。14日(水)には「新型コロナウイルスの第3波での死亡者の内訳」について詳しく伝えていた。統計をまとめた表がとても分かりやすく、これからの対策にも触れて紹介していてとてもよかった。最近「変異ウイルスの疑い」ということばがよく出てくるが、その疑いというのは症状で分かるのか、それとも通常の新型コロナウイルスと違ってどこが変異なのかが伝わりづらいところがあると思う。これからの報道の中で伝えてもらえれば、対策するうえでの参考になるのではないか。

(NHK側)

第3波の死亡者の内訳について統計をまとめたのは厚生労働省のDMATである。札幌市の新型コロナウイルスの第3波による死者の状況、実情を調べてまとめているデータを分析して伝えた。数字をただ伝えるだけではなく、その裏にどういう現実があるのかということも伝えることができるようにしていきたい。

- ニュース番組と情報番組の間のような印象で、それぞれのコンテンツは大変よくできていて、情報量の多さに感心した。だが、「道産食材の料理コンテスト」について、コンテストなのに順位もなく、どこのホテルで開催したのか分からなかった。何のためにこのコンテストを取り上げたのか伝わらなかったのが残念だった。「ローカ

「ルフレズ滞在記」については、前週を見逃すと何をしていたのかが分からず、置き去りにされているような気がした。野外音楽フェスの話では、Uターンした地元の人たちが出演したり、このフェスから東京に巣立ったミュージシャンがいたりという話だったが、都会に出たいという気持ちは分かるが、結局東京を目指すのがいいことなのだという印象が残ってしまい残念だった。また、「ほっとニュース北海道」と「北海道道」、「北海道スタジアム」で出演者や内容がかぶっている部分が出ているので、その辺の整合性を若干危惧している。番組の方向性としては間違っていないと思うが、これからどういうふうにとまとめていくのか期待している。

- 見ていて引っかかる部分が少ない、ほかのニュース番組などとは一線を画す、とても独自色の強い情報番組に成長していると感じた。新しいロゴはかわいらしいが、色味の明度、彩度が近いので見づらさがあった。新テーマ曲は、耳に残りやすくとてもいいと思う。ただ、トピックとトピックの間に時々間の空く瞬間があった。映像は流れていて無音だとドキッとしてしまうのではないかな。天気予報は、ただ予報を伝えるのではなく、天気の読み方とか気象の知識について説明しているのがとてもためになっていいと感じた。気象予報士の浜崎慎二さんが、いかに気象のことを知ってもらおうか、興味を持ってもらうかという思いはとてもすばらしいと思った。だが、14日(水)では新型コロナウイルス関連の感染者の数や第3波の死亡の実情を伝えた直後に五輪まで100日だと伝えたり、16日(金)には札幌の外出自粛要請延長のニュースの直後に登別温泉でゴールデンウィークに向けた一斉清掃の話題を取り上げていたりしていた。新型コロナウイルス関係のニュースのあとに、人が集まるイベントの話題が続くと心情としてモヤモヤしてしまう部分がある。せめて、間に違う話題を挟むなどして、伝える順序を考えたほうがいいのではないかな。また、道内の地域のニュースを満遍なく取り上げようという意欲を感じるが、どうしてこの話題がこの地域でなければいけなかったのだろうかという疑問が残るものがあった。だが、新型コロナウイルスの影響でなかなか遠出できない中、道内各地の生の話題に触れることができるととても興味深かった。衆議院北海道第2区選出議員補欠選挙関連の「投票に行こう！ひとくちメモ」について、企画としてはとてもいいと思うが、取り上げた話題が初歩的過ぎるものだったので、今後はもっと深く掘り下げられることを期待している。

#### <放送番組一般について>

- 3月19日(金)の北海道道「再び動き始めた地熱発電」を見た。地熱発電の仕組みについて模型を基に、野村優夫アナウンサーが仕組みや利点、開発の難しさなど分かりやすく説明していた。社会としてエネルギーの選択をしていくときに考える材料を

提供したいという姿勢が伺え、MCの鈴木貴之さんも再生可能エネルギーが北海道の今後にどのようにつながっていくのかという視点で伝えており、とてもいい番組だった。ただ、東京電力福島第一原子力発電所の事故以降、全国で100件以上の開発が進んでいると伝えていたが、ほかの地域と比べて北海道ではなぜ進んでいなかったのかが分かりにくかった。温泉への影響や国立公園の存在などがハードルになるとあったが、ほかの地域も地熱を利用しようとするのと似たような問題はあったのではないか。北海道で進まない理由を併せて知りたかった。

- 地熱発電は調査から稼働まで時間と費用で10年前後かかるハードルが高いものだと分かった。今まで疑問に思っていたことがはっきりと分かりやすく解説されていた。
- 4月2日(金)の北海道道スペシャル「2年目突入！倉本聰SP～ドラマ界の巨人はなぜ北海道を選んだか～」(総合 後7:30～8:19 北海道ブロック)を見た。倉本聰さんは北海道のテレビ界の重鎮という印象だったが、MCの鈴木さんと多田萌加さんを温かく迎え入れていて、オープンマインドな感じで対談が始まり安心感を持って見られた。都会育ちだが、アイデンティティーに自然が強くあったと生い立ちを語る姿が印象的だった。また、脚本家を目指しながらもラジオ番組の描写に面白さを見出したり、テレビの脚本家として独立してからもシナリオ技術者としての腕を磨くためにがむしゃらに作品を書いたり、随所に才能の片鱗があったと感じた。利害を超えた本質的な人間関係を洞察する才能が、北海道との関係の中で開花した人だということが分かって、一層親近感が持てた。倉本さんが「自然っていうものが生きてるなって感じ」と話されたり、鈴木さんも自然と対峙する生活の中からのいろいろな想像力のヒントを得ているのだということがかいま見えたりして、通じ合うものがあるとてもいい対談だった。
- 4月9日(金)の北海道道「挑む杜氏・市澤智子の世界」(総合 後7:33～7:58 北海道ブロック)を見た。日本酒界の風雲児と呼ばれる、北海道で唯一の女性杜氏がどんな酒造りをするのか非常に興味を持った。東京の短期大学で醸造の勉強をして、ビール会社や酒蔵でも修行されたという非常に研究熱心な方なので、杜氏としての経験年数や今勤めている醸造会社の経験年数などが分かればさらによかったと思う。市澤さんは米と会話ができると言っており、今までの経験と強い信念から自信を持って酒造りをしているのが伺えた。そんな市澤さんが、どんな酒ができるのかと心配と期待が混じる場面もしっかりと捉えており、初搾りの場面もとても臨場感があり、現場にいるような感覚を味わうことができ、またそのときの彼女の表情から納得した酒ができたのだと感ずることができた。ただ、同時にほかの杜氏の反応もあればよかったと思う。北海道で活躍する職人はたくさんいると思うので、今後もそうした方を取材してほしい。

いと感じた。

- 杜氏の市澤さんが取り組む「極力米は削らない」という酒造りそのものにもとても興味をそそられ、同時に市澤さんの格好よさにとてもしびれた。飾らないありのままの魅力や、酒造りへのチャレンジ精神と仕事に対する厳しさ、すべてを捧げるまっすぐな情熱、そして精米度合いが高い大吟醸がもてはやされている今の時代に反旗を翻す強さなど、酒造りの様子を淡々と伝える構成も題材によく合っていてすばらしかった。人物を取り上げる場合、ゲストとしてスタジオに来ることが多いが、来ていないことがかえって市澤さんのストイックさを際立たせていた。また、今回は「女性杜氏」ということばを使っているが、女性であることを強調しすぎることなく非常にフラットに市澤さんという人物を捉えていることも、とても好印象だった。
- 4月16日(金)の北海道道「博士、マジですか！？～ユニーク学者が明かす生命の神秘～」を見た。北海道大学の中垣俊之教授のとて品質の高い研究を分かりやすく伝える内容だった。番組冒頭で、中垣教授がイグノーベル賞を取ったという紹介があったにも関わらず、授賞理由を言わないことが気になったのだが、授賞理由になった研究を番組の中で解説していているほどなと思った。
- 北海道大学の中垣教授の興味深い研究内容の紹介と分かりやすい解説で、どんどん引き込まれていくような感覚だった。粘菌の特性を生かして迷路や北海道地図を作る実験の数々は興味深く、鈴井さんと多田さんのリアクションからも臨場感が伝わってきた。ふだんなじみのない単細胞生物の賢さを発見できたことはもちろん、オンラインやリモート、バーチャルな世界で生活を送っている私たちにリアルな視点のすごさと大切さを教えてくれたと思う。
- 4月17日(土)の「北海道スタジアム春ノ陣―第一部―」と「―第二部―」(総合 後7:30～8:45、9:00～10:20 北海道ブロック)を見た。「第一部」は、総合司会の加藤浩次さんと北海道にあまり縁がないであろう人たちをゲストに迎えており、張り切っている加藤さんとゲストの対比が興味深かった。179市町村の人たちとリモートでつなぐという発想は、新型コロナウイルスの現状において最大限のことをされていると思うし、事前準備だけでも大変だったであろうということが画面から感じられた。番組では、各市町村で考えた地域ならではのキャッチコピーを考えてもらい紹介していたが、一生懸命考えてアピールしようとしている姿はとても胸を打たれた。ギネス記録に挑戦するコーナーで、接続の問題なのかリモート画面で白抜きの部分があって気になった。全体としては、北海道各地の人たちを全道に発信するという形だったので、もっと全国にも発信してたくさんの人に見てもらえるといいのではないかなと思う。新型コ



コロナウイルスの影響の中であって、とても有意義な一つの方向性だと思う。北海道は179の市町村があり、その一つ一つの個性を発信することによって、北海道全体の魅力が出てくると思うので、これからのステップアップを期待している。「第二部」は、TEAM NACSを特集していた。メンバーの舞台にかける情熱やその舞台裏というものを延々と描いていたが、それをわざわざこの番組の中で発信する必要があったのか。彼ら自身の存在がすでに北海道から発信するチームになっているので、そこを掘り下げていくのはどうなのかと思った。最後のインタビューで「自分の生まれた街が一番好き」だと言っていたが、「北海道スタジアム」ならではの特別な仕掛けや取り組みがあればおもしろかったのではないか。

- 4月19日(月)の「ひるナマ！北海道」の春レタスでお手軽韓国料理！の特集を見た。野菜ソムリエの土上明子さんが、料理の仕上がり具合だけでなく、旬の春レタスの特徴もしっかり視聴者に伝えていた。今回のようにキャベツを手でちぎることの意味や、素材を生かすための火入れの順番、残ったときの保存方法など、料理を作る人が欲しい情報をしっかり説明していてよかった。ただ、サツマイモ原料の韓国はるさめはどこで手に入るのか、インターネットで簡単に手に入る方法なども分かりやすく伝えてもらえれば、視聴者もより入りやすかったと思う。
- 4月20日(火)の「ほっとニュース北海道 道東スペシャル」(総合 後6:45~7:00 帯広・釧路ブロック)を見た。ふだんの5分間では取り上げられない地域色の濃い話題で満足感があつた。身近な話題が取り上げられることは、NHKへの親近感につながるのではないか。天気一つを取っても、十勝地方だけでも北部、中部、南部、さらに町村の天気が非常に詳しく伝えられていて見応えがあつた。十勝地方だけでなく、道東の釧路市、根室市も同じように詳しく伝えられていたので、15分間になるとこんなに違うのだなと思った。この枠を十二分に生かして、道東の魅力、課題発掘に取り組んでもらいたいと期待している。

(NHK側)

15分という形でより地域に密着した情報を出すことによって、地域の方にさらに喜んでもらえる情報満載の番組、ニュースを目指していきたい。

- 4月21日(水)の「NHKニュース おはよう北海道」の自動車科で名車が復活旭川実業高校の挑戦！の特集を見た。旭川実業高校の自動車科の女子生徒がリーダーとなり廃車をよみがえらせようとしていて、女性活躍の時代に合っている内容だと感じた。若い世代の人たちに、いろいろな職業があつていろいろな活躍のしか

たがあるのだということをもっと伝えてもらい、子供たちを応援できるような番組を作ってほしいと思う。

- 「ほっとニュース北海道」の中でときどき二次元コードが表示されており、スマートフォンで読み込んでその遷移先のホームページに行ってみたら、そのホームページの記事がたいへん充実していた。キャスターのブログも読んだが、これだけの情報を作るのはとても大変だろうと思うほどとても濃い内容で、読み物としてしっかりしている。それだけの情報があるのだから、今後は実際の放送の中でももっと二次元コードを出したり、ホームページでも詳しく伝えていきますと紹介したりした方がよいと思う。一方で、「ほっとニュース北海道」を放送している夕方の忙しい時間帯に、スマートフォンで二次元コードを読み込んでくれる人がどれぐらいいるだろうかという疑問もある。
- 4月10日(土)のNHKスペシャル「池江璃花子 新たな挑戦」を見た。トップアスリートが勝敗を分けるような局面で何を考えていたか、どんなことを見ていたかという答えを引き出せるかどうかは難しいことだと思う。だが、この番組ではインタビューする側の質問がとても丁寧に練られていて配慮を感じられた。池江さんの受け答えが、過去のVTRのインタビューと今回の生放送とでははっきり違っており、とてもよいインタビュー番組だと感じた。アナウンサーが考えて構成したのか、あるいはスタッフみんなで考えながら質問を練って聞いたのか知りたいと思った。ただ、NHKプラスで見たときに、「この映像は配信しておりません」と画面に出て1分間中断するようなどころがあったので、配信しなかった理由を知りたい。

(NHK側)

スポーツ映像では地上波で放送する権利、BSで放送する権利、ネットで配信する権利といったように権利が分かれており、NHKプラスで中断した時間はネット配信不可の映像だった。

- 4月10日(土)の【特集ドラマ】流行感冒(BSP 後9:00~10:13)を見た。志賀直哉のスペイン風邪を題材にした小説を原作とした単発ドラマだったが、現在の新型コロナウイルスのカリカチュアみたいなどころが多くあり、おもしろさを感じるとともにドキッとさせられるところも多かった。大正時代の暮らしと疫病と騒動を客観的にとらえることで、現代の社会的な問題が見えてくる効果もあった。俳優陣の演技は魅力と説得力があり、コミカルな部分のさじ加減も絶妙で、自然にずっとドラマの世界に入ることができた。原作と話の大筋は同じでもおもしろみや深みや

現代性といった脚色が加えられており、NHKのドラマ制作の力量を改めて感じた。新型コロナウイルスの影響を受けて出口が見えない今、いつかは感染の不安はなくなるのだということがドラマで見ることができほっとさせられた。ぜひ地上波でも放送をして、多くのかたに見てもらいたい。

- 4月1日(木)の聖火リレーのライブ配信について。長野市で聖火ランナーが走っていたが、音声の一部が切れて走っている姿だけが映っていた。その後、音声は戻るが抗議の声は消えていた。これに関して「聖火ランナーのかたがたへの配慮も含めて、NHKとしてさまざまな状況に応じて判断している」という回答をしていた。確かにランナーの感情を思うと、音をそのままにするのはどうかという部分もあるが、何のコメントもなく、ただそこだけ音が切れているというのはとても不自然な感じがするので説明が欲しい。

(NHK側)

聖火リレーの様相をインターネットのライブストリーミングでお届けしていたところ、急に大きな音が沿道から発生したので対応した。ランナー走行中の映像・音声については、走っている聖火ランナーの方々への配慮も含め、状況に応じて対応している。ランナーの方々に焦点を当てたものなので、音声の内容などによって対応しているわけではない。東京オリンピック・パラリンピックをめぐる様々な意見については、これまでもニュースや番組などで取り上げており、今後も、意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにしていく。

NHK札幌拠点放送局  
番組審議会事務局